



Title	ヒンディー語の知覚動詞文について
Author(s)	西岡, 美樹
Citation	アジア太平洋論叢. 2005, 15, p. 67-98
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100015
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヒンディー語の知覚動詞文について

西岡美樹*

1. はじめに

日本語によく似た言語であるといわれるヒンディー語は、もともとインド・ヨーロッパ語族イラン語派の出自であることは周知のことだが、日本語と似ているといわれる主な理由は、語順がSOVであること、膠着語の性格が強いことなど、あくまで語、句、単文レベルでの話である。これが、二つ以上の文から成り立つ複文になると、話は全く違ってくる。現存のインド・ヨーロッパ語族出自の諸言語と同じ性格が顕著に現われる。

その代表的なものとして、知覚を表す動詞を使った文を挙げることができる。本稿では、ヒンディー語におけるこの知覚を表わす動詞を用いた例文を観察し、英語や日本語とも比較、対照しながら、文の統語的特性、また、それに付随して明らかとなる知覚動詞の特徴を整理し、考察する。

2. 枠組みと例

例文を観察する前に、本稿において必要となる統語構造の枠組み、および扱う動詞群について簡単に述べておく。文の構成要素は、主語 (S)、目的語 (O)、動詞 (V) と表わす。

文 = [S V] もしくは [S O V]

* 大阪外国語大学非常勤講師

Vには、例えば日本語の「きれいだ」の助動詞「だ」に相当するコピュラを伴った述語名詞 (Predicate Noun, PredN)、述語形容詞 (Predicate Adjective, PredA) も含む。その他の副詞的な文要素はすべて Adverbial (Ad) と表示する。

また、S と O には通常名詞句が入るが、しばしば文が入る場合もある。例えば、日本語の知覚動詞「見える」、「見る」を取ってみると、「<文>の見える」、「<文>のを見る」のように、S と O の位置に文そのものが埋め込まれるのが分かる。もっとも、その際、埋め込まれる側の従属文を照応する準体助詞の「の」が必要になる。本稿では、このような従属文の述語が (コピュラも含め) 動詞の定形である場合を定形節 (Finite Clause) と呼ぶ。なお、複文の際に定形節をつなぐために必要になる同格接続詞は、Appositive (App) で表わす。

ところで、ヒンディー語に目を移すと、この場合、従属文を定形節のまま S や O の位置に埋め込むことはできない。従属文を主文の後にそのまま置くか、文を終えることのできる動詞の定形を未完了分詞、完了分詞のような非定形に変えなければならない。このように動詞の定形が、非定形 (未完了分詞、完了分詞、不定詞) になるものを、定形節に対し非定形節 (Non-finite Clause) と呼ぶ。

本稿では、以上のとおり主語への文の埋め込み (主語型)、目的語への文の埋め込み (目的語型) に大きく分けて観察、分析を行うが、例文観察に入る前にもう一つ、ここで扱うヒンディー語の知覚、認識、感覚を表す主な動詞 (以下、一括して「知覚動詞」と称する) について概観しておきたい。

一般的な知覚もしくは認識		
知覚	lagnā	感じられる、思われる
	mālūm/gyāt/mahsūs/pratit honā	感じられる、思われる
認識	mānnā	認める、思う
	samajhnā	理解する、思う
	pānā	分かる、知る

知覚のところに挙げた動詞はすべて自動詞扱いされ、感じたり思ったりする当事は与格²で、感じられる事柄が主格で表わされる。また、認識として分類した

ものは、他動詞として扱われる³。

この他にも、‘nikalnā’「後で判明する」、‘pahcānā’「既知の人やモノを見てそれが何であるか分かる」というような知覚動詞もあるが、特殊なものなのでここでは扱わない。また、ここでいう知覚とは、広い意味での知覚を指し、認識と呼んでいる方は、いわゆる五感による感覚的な知覚ではなく、知力、知性による、つまり知的な知覚を指す。

また、今述べた感覚の方についてだが、具体的には視覚、聴覚、臭覚、味覚、触覚の五感のことを指す。この五感に関するヒンディー語の知覚動詞の主なものは以下のとおりである。

五感による感覚もしくは知覚				
視覚	dīkhnā dīkhāi denā/parṇā	見える	dekhnā	見る
聴覚	sunāi denā	聞こえる	sunnā	聞く
臭覚	mahaknā, vāsnā sugaṃdh/xuśbū ānā	匂う 匂いがする	sūṃghnā mahak/vās lenā	嗅ぐ
	durgaṃdh/badbū ānā	臭う 臭いがする	sūṃghnā	嗅ぐ
味覚	(svād) lagnā	味がする	svād/mazā lenā	味わう
触覚	lagnā	触る	chūnā hāth lagānā	触れる

この中で、一般的のどの言語でもよく使用されるものは、視覚、聴覚の動詞である。この二つは後ろで改めて取り上げるので、ここでの詳しい説明はせず、それ以外のものを見てみよう。まず臭覚だが、他動詞の方から説明すると、‘mahak’もしくは‘vās’「匂い」という抽象名詞に動詞‘lenā’「取る」を併せた複合動詞で表わすものと、中立的な「におい」を「嗅ぐ」という一語の動詞‘sūṃghnā’とがある。一方の自動詞の方は、先の「匂い」を表す抽象名詞を内包した動詞、つまり「匂う」に当たる‘mahaknā’や‘vāsnā’を使うか、抽象名詞「匂い/臭い」と動詞「する」を併せた複合動詞のように、‘sugaṃdh/durgaṃdh’（または‘vāsnā/

badbū)「匂い/臭い」と‘ānā’「来る」を併せたものを使用する。実際、「いいにおいがする」、「臭い(においがする)」という表現には、この複合動詞の方がよく使用される。次に味覚に移ると、臭覚の場合と同じで、他動詞では‘svād’「味」という抽象名詞を目的語にし、動詞‘lenā’「取る」と併せて複合動詞として使用する。一方、自動詞の場合、味について特に言及しない限り、この‘svād’を明示する必要はない。広く知覚を表す動詞のところで挙げた‘lagnā’「感じられる」のみで表わすことができる。最後の触覚についても同じで、‘lagnā’で表わす。触覚の‘lagnā’は、上の一般的な知覚「感じられる」と同じ動詞である。これは、触覚が感覚器官一つに絞られることのない、いわば五感の中で一番中心にある感覚だからである。それに対し臭覚と味覚は、五感の中でも「におい」、「味」という特殊でかつ周辺的な領域に属する。視覚や聴覚に比べても使用頻度が低いため、ここでは取り扱わない。また、この臭覚、味覚、触覚の他動詞も、それぞれ各々の感覚を得るための動作を表わす動詞に過ぎないので、ここでは取り上げない。

このように、本稿では一般的な知覚もしくは認識を表わすもの、そして視覚、聴覚の知覚動詞に的を絞り、それぞれの例文⁵を以下で観察していく。

2.1. 主語型

主語型の主なものとして、動詞‘lagnā’「感じられる/思われる」、また、動詞ではないもの‘mālūm/gyāt/pratī’をコピュラ‘honā’と複合させる複合動詞、そして五感の中の視覚、聴覚を表す「見える」、「聞こえる」の‘dīkhnā’もしくは名詞「見ること」との複合動詞‘dīkhāi denā/parṇā’、そして「聞こえる」の‘dīkhāi denā/parṇā’の例を以下に挙げる。

2.1.1. ‘lagnā’「感じられる/思われる」

- (1) āp vyast lag rahe haiṃ.
 あなた 忙しい 感じられる-幹 続く-完了 コー現在
 「あなたはお忙しいようですね。」

(1) は、コピュラを伴う形容詞述語文 ‘āp vyast hai’ 「あなたが忙しい」の口

(4) (tum) dekhne mem to haṭṭe-kaṭṭe mālūm hote ho.
 君 見る-不定・斜 に 小詞 丈夫な 分かった コー未完 コー現在
 「あんた、見た目には丈夫そうなのに。」 [SBh p.68]

(5) dhan milne kī āsā mem ve kaṣṭ bhī unhem
 富 手に入る-不定・斜 の 望み に それら 苦勞 も その方
 sukhdāyī mālūm hue.
 喜ばしい 分かった なる-過去
 「富が手に入るという望みの中で、それらの苦勞もその方(ドローナ)にとっては喜ばしいものと思えた。」 [MBh p.49]

(4) も (3) と同様、形容詞述語文である。「あんたが丈夫だ。」というその従属文が、主文の述語 ‘mālūm hotā hai⁸’ の主語として埋め込まれている。したがって、これも述語の動詞形態は、‘tum’ に一致する。(5) は、主文の述語動詞が ‘mālūm honā⁹’ 「思われる＝思える」、「分かる」という、動作を表わす複合動詞になっているパターンである。

では、次に動詞述語文の例を見てみよう。

(6) aisā pratit hotā hai, is samkaṣṭ se chuṭkār nahim
 このようなこと 分かった コー未完 コー現在 この 危機 から 解放 否定
 milegā.
 得られる-未来
 「この危機から解放されないようだ。」 [MBh p.149]

前節の (2) と同じく、(6) の主文の主語 ‘aisā’ も、従属文となる「この危機から解放されないだろう。」を照応する。この場合も、‘aisā’ の位置に従属文が主語として出てくることはない。また、例文には出てきていないが、先の (2) と同じで、通常、主文と従属文の間に ‘aisā’ が照応することを示す同格接続詞 ‘ki’ が現われる¹⁰。

2. 1. 3. 'dikhnā'(または'dikhāi denā/parṇā)「見える」

前にも少し述べたが、ヒンディー語の「見える」には、動詞一語の 'dikhnā' (または 'dikhnā') の他、'dikhāi denā' もしくは 'dikhāi parṇā' 「見ること」という抽象名詞による複合動詞で表わすことができる。まず、'dikhnā' の例から見てみよう。

- (7) hām̃, tum to pareśān dikh rahe ho.
ああ 君 小詞 困った 見える-幹 続く-完了 コー現在
「ああ、おまえ困っているようだ。」 [TYH p.99]
- (8) koī peṛ ke nice baiṭhā (huā) dikh rahā hai.
誰か 木 の 下に 座る-完了 コー完了 見える-幹 続く-完了 コー現在
「誰か木の下に座っているのが見える。」

(7) は、2.1.1. や2.1.2. で見られたものと同じ形容詞述語文が従属文として埋め込まれたものである。主文の述語は 'dikhnā' の異形 'dikhnā' 「見える」なので、日本語で言えば「困ったように見える」というところである。下の (8) では、動詞述語文の「誰かが木の下に座っている。」が主文の「見える」の主語に埋め込まれている。この従属文の述語 'baiṭhā' は、定形では過去時制を表わすが、ここは埋め込みに伴い非定形化された完了分詞である。また、しばしば () 書きしたようにコピュラの完了分詞が挿入されることもある。このコピュラについては、もう少し後で詳しく述べる。

次に複合動詞を使用した例も見てみよう。

- (9) āge kuch āg jaltī huī dikhāi de rahī hai.
先に 少し 火 燃える-未完 コー完了 見ること 与える-幹 続く-完了 コー現在
「先に火がわずかに燃えているのが見えるぞ。」
- (10) bhīm apnī mastī meṃ jhūmtā huā ātā dikhāyī
ビーマ 自分の 有頂天 に 揺れる-未完 コー完了 来る-未完 見ること

paṛā.

生じる－過去

「ピーマが有頂天になって、体を揺らせながら歩いているのが見えた。」 [Mbh p.91]

(9) も「火がわずかに燃えている。」という動詞述語文を、主文の主語として埋め込んだものである。このコピュラの完了分詞は、先の (8) でも挿入されることがあると述べたが、省略することができるオプションとされている。(10) も複合に使用されている動詞が異なるだけで、構造は (8)、(9) と同じく、従属文の「ピーマが有頂天になって、体を揺らせながらしながら歩いている。」という文を、主語として埋め込んでいるのである。

ちなみに、‘dikhnā’、‘dikhāi denā’ もしくは ‘dikhāi paṛnā’ の代わりに、「視界、視線」を表す名詞 ‘nazar’ と「来る」という動詞 ‘ānā’ を複合させた ‘nazar ānā’ という迂言的な表現も使用される。前章の五感のところでも述べた「匂う／臭う」の複合パターンと同じである。日本語ならば「視界に入る」といった表現に類似する。

2.1.4. ‘sunāi denā/paṛnā’ 「聞こえる」

視覚による認識「見える」の次は、聴覚による認識「聞こえる」についての例を観察するが、この「聞こえる」という動詞については、「見える」のような一語の動詞がない。この場合、本節の見出しのとおり、前節の「見える」と同じ複合動詞パターンが使用される。

- (11) gāṛī kī āvāz dūr se nikaṭ ātī huī sunāi paṛī.
列車の音 遠くから 近くに来る－未完 コー完了 聞くこと 生じる－現在
「列車の音が遠くから近づいてくるのが聞こえた。」 [KH p.203]

(11) は前節の (8)、(9)、(10) と同じく、主文の主語に「列車の音が遠くから近づいている。」という文が埋め込まれている。

ちなみに、この ‘sunāi denā’ もしくは ‘sunāi paṛnā’ には、「耳’ ‘kān’ と物事が

生じるというような意味合いの時に使用される動詞 ‘paṛnā’ による複合動詞の一種とも言うべき ‘kān mem paṛnā’ という迂言表現が存在する。日本語に「聞こえる」と「耳に入る」という表現が存在するのと同じである。また、日本語の「その話は奇妙に聞こえる。」(英語なら ‘hear’ ではなく ‘sound’) のような、「その話が奇妙だ。」という従属文が「聞こえる」の主語として埋め込まれるような、名詞述語文もしくは形容詞述語文の埋め込みは、ヒンディー語では不可能である。「聞いて・・・とを感じる」となり、感覚を経た認識ということで、主文の述語動詞は2.1.1. の ‘lagnā’ が通常使われる。

2. 2. 目的語型

次に目的語型についての例を挙げるが、ここで使用される動詞は、「感じる／思う」に当たる ‘mānnā’、‘samajhnā’、そして先の主語型で挙げた「見える」「聞こえる」の他動詞である「見る」‘dekhnā’、「聞く」‘sunnā’である。また、主語型にはなかった「得る」‘pānā’を使った例を最後に挙げる。

2. 2. 1. ‘mānnā’ 「認める／思う」

動詞 ‘mānnā’ は、広義では日本語の「思う」に当たるが、見て判断する、またそれによしと承認する場合に使われる。

- (12) phir bhī āp satyāgrah ko hathiyār mānem, ...
 それでも あなた サティヤグラハ 対格 武器 思うー未来・仮
 「それでもあなたがサティヤグラハを武器と思うならば、・・・。」 [HS p.67]

(12) は、‘satyāgrah hathiyār hai.’ 「サティヤグラハが武器だ。」という「A は B だ」という名詞述語文を、A を対格、定形の述語形容詞を非定形化、すなわち、日本語の「だ」に当たるコピュラを削除した上で、主文の述語動詞 ‘mānnā’ の目的語として埋め込んだものである。目的語型の埋め込みの場合、従属文の主語は対格表示される。

では、動詞述語文の場合はどうか。下の (13) がその例である。

- (13) maim māntā hūñ ki rājāoṃ kā jīvan pṛapaṃcoṃ se bharā
私 思うー未完 コー現在 同格 王 の 人生 策略 で 満ちた
huā hotā hai, ...
コー完了 コー未完 コー現在
「王の人生が争いに満ちているものだということは分かっている。」 [SBh p.61]

動詞述語文の場合、主語型 (2.1.1. および2.1.2.) の時と同じで、主文の目的語として近称詞 'yah' 「これ/それ」もしくは 'aisā' 「このようなこと」を照応詞として置くか、もしくは想定し、「王の人生が争いに満ちているものだ。」という従属文を同格接続詞 'ki' 以降に置くパターンを取る。(12) のような名詞述語文、もしくは形容詞述語文のように非定形節化し、主文の目的語に埋め込む例は見られない。

2. 2. 2. 'samajhnā' 「理解する/思う」

ここで使用される動詞 'samajhnā' も広義では「思う」と考えてよいが、前節で使用されていた 'mānā' と若干違い、物事を悟り知る、了解する意味に使用される。以下に挙げるのは、形容詞述語文と動詞述語文の例である。

- (14) maim apne āp ko anārī samajhtā hūñ.
私 自分自身 対格 無知の 思うー未完 コー現在
「僕は自分を無知だと思う。」

- (15) pāṇḍav yah samajh gaye ki vedvyās jī kyā
パандаヴァ これ 理解するー幹 行くー過去 同格 ヴェーダヴァーサ 尊称 何
kahane āye the.
言うー不定・斜 来るー完 コー過去
「パандаヴァたちは、ヴェーダヴァーサ仙が何を言いに来られたか分かった。」

[Mbh p.93]

前の ‘mānnā’ の時と同じく、(14) は形容詞述語文「僕は無知だ。」という文を ‘samajhnā’ の目的語として埋め込んだもので、(15) は「ヴェーダヴァーサが何を言いに来られたか。」という動詞述語の疑問文が、同格接続詞 ‘ki’ 以降に置かれている¹²。

2. 2. 3. ‘dekhnā’ 「見る」

さて、目的語型の感覚の方に移ろう。2.1.3. の自動詞「見える」の対になるものが、ここで挙げる他動詞「見る」‘dekhnā’ である。

- (16) unhoṃne ek sundar kanyā ko nāv calāte dekhā.
 その方+能格 1 美しい 娘 対格 舟 漕ぐ-未完 見る-過去
 「その方は一人の美しい娘が舟を漕いでいるのを見た。」

(16) では、「美しい娘が舟を漕いでいる。」という文が、主文の動詞 ‘dekhnā’ の目的語として埋め込まれている。従属文が主文の目的語として埋め込まれる場合、元々主語の性・数に一致していた動詞の未完了分詞の形態は、直格形¹³から一律、斜格形の ‘-te’ に変わり、コピュラは削除される。

なお、この文は、次の定形節構造から派生したものである。

- (17) unhoṃne (yah) dekhā ki ek suṃdar kanyā nāv calā
 その方+能格 これ 見る-過去 同格 1 美しい 娘 舟 漕ぐ-未完
 rahī thī.
 続く-完了 コー過去
 「その方は、一人の美しい娘が舟を漕いでいるのを見た。」

従属文の定形動詞には、進行形と呼ばれる『語幹 + ‘rahā’ + コピュラ』の形を使用している。ヒンディー語の動詞には現在時制を表わす単純形はなく、『未完了分詞 + コピュラ』、日本語で言えば動詞の「て」形を使った「-て・いる」の「いる」で表わすのだが、どちらも「未完了の状態にある」ということを指すもの

である。つまり、「走る」もしくはここの「漕ぐ」のような動作を表わす動詞の場合、「走っている」、「漕いでいる」(‘calātī hai’) という動作の未完了状態を示すものになる¹⁴。ヒンディー語の場合は、この未完了分詞とコピュラの組み合わせである ‘calātī hai’ という形は、広いタイムスパンの中での動作の繰り返しに使用される形である¹⁵。さらに、先ほど触れた進行形という特殊な形があり、これを以って、その動作が広いタイムスパンから狭いタイムスパンの中で継続している事象を表わす。したがって、ここも「見た」という狭いタイムスパンでの動作の継続になるので、進行形が使われる方が普通である。逆の (17) から (16) の埋め込みの際は、進行形そのものを埋め込むことはなく、未完了分詞のみを使用する。

また、この未完了分詞を使ったものの他に、完了分詞を使用した例も見られる。以下の (18) がそれに当たる。

- (18) mairne ek bandar ko per ke nice baiṭhe dekhā.
 私+能格 1 猿 対格 木 の下に 座る-完了 見る-過去
 「私は木の下に一匹の猿が座っているのを見た。」

(18) は、「猿が木の下に座っている。」‘ek bandar per ke nice baiṭhā hai.’ を未完了分詞の場合と同じ操作で主文の目的語に埋め込む。

この埋め込みについては、(18) のようになるのが普通だが、以下の (19) のように、しばしばこれも斜格形にならず、直格形のままだにされることがある。[古賀：1986]

- (19) us kisān ko apnī śaraṇ mem āyā dekh imḍradev baṛe
 その 農夫 対格 自分の 庇護 に 来る-完了 見る-幹 インドラ神 大変
 prasann hue.
 喜んだ コー過去

「その農夫が自分のところへ庇護を求めてきたのを見てインドラ神は大変喜ばれた。」

[KH p.201]

「その農夫が自分の庇護下に来た。」という従属文を埋め込む際、本来なら完了分詞が男性・単数・直格形の ‘āyā’ ではなく、男性・単数・斜格形の ‘āye (āe)’

になるはずだが、そうはならない場合が多々見られる¹⁶。なお、ここの「見る」には動詞の語幹が使用されているが、特に接続分詞 ‘kar’ が落ちたわけではなく、日本語の「～のを見／見て」のように語幹本来に連用形と同じ用法があるためである。

ところで、日本語の「見る」や英語の ‘see’¹⁷ には「判断する、思う、分かる」のような認識に及ぶ意味も持つことがある。ヒンディー語のこの ‘dekhnā’ もしかりで、以下のように用いることが可能である。

- (20) āp dekhte haiṃ ki alag alag sādhnōṃ ke alag alag niatije
 あなた 見る－未完 コー現在 同格 別 別 手段 の 別 別 結果
 āte haiṃ.
 来る－未完 コー現在
 「異なる手段からそれぞれ異なる結果が生じるのがお分かりでしょう。」 [HS p.59]

このような場合、埋め込みにはせず、「異なる手段からそれぞれ異なる結果が生じる。」という動詞述語文を、定形節のまま同格接続詞以降に置く。

また、例えば日本語の「見る」は、「ことを甘く見る」のように「判断する、思う、見なす」という意味で用いることができる。つまり、日本語では「AをBと見る」という名詞述語文や形容詞述語文の主文への埋め込みが可能なのだが、ヒンディー語では、埋め込みによるこの用法は見られない。

2.2.4. ‘sunnā’ 「聞く」

次に「聞く」について見てみよう。

- (21) kyā āp ne kabhī sāuṭh iṃḍiyan ko hiṃdī bolte
 小詞 あなた 能格 いつか 南 インド人 対格 ヒンディー語 話す－未完
 hue sunā hai?
 コー完了 聞く－完了 コー現在
 「あなたは南インドの人がヒンディー語を話しているのを聞いたことがありますか。」

これも「見る」のパターンと同じで、従属文の主語である「南インドの人」を対格表示し、述語動詞の未完了分詞を斜格形に変える。(16)と違うところは未完了分詞にコピュラの完了形が付いているところである。

また、これも前節の「見る」同様、定形節を使った構造で表わすことができる。

- (22) kyā āp ne kabhī sunā hai ki sāuṭh iṃḍiyan
 小詞 あなた 能格 いつか 聞く-完了 コー現在 同格 南 インド人
 hiṃdī bolte haiṃ?
 ヒンディー語 話す-未完 コー現在
 「あなたは南インドの人がヒンディー語を話しているのを聞いたことがありますか。」

この(22)のような定形節による構造も普通に使用される。なお、ヒンディー語の場合、主文と従属文の時制を一致させる必要はない。基本的に従属文自体の持っている時制が優先される。

2.2.5. 'pānā' 「分かる」

ここで扱う動詞 'pānā' には色々な意味があるが、原義はおおよそ日本語の「得る」に当たる。状況を把握するということから転じて、「分かる」「知る」のような広い意味での認識を表わすのに使用される。自動詞のところでは上げた 'lagnā' のような自然に感じるものではなく、視覚や聴覚を含め、知的に物事を把握するという場合に使用される。具体的のどのような例か、以下の(23)から見ていこう。

- (23) maiṃne unheṃ bahut hī catur aur yogya pāyā.
 私+能格 彼ら-対格 とても 小詞 賢い そして 有能な 分かる-過去
 「私は、彼らがとても賢く有能だと分かった。」

これは、「彼らが賢く有能だ。」という形容詞述語文を主文の目的語に埋め込んだものである。これまで例と同様、従属文は非定形化、つまり形容詞述語文の場合はコピュラの削除がされて、主文に埋め込まれる。

次は動詞述語文の例である。

- (24) ... jab 18vīm śatī tak ham 'urdū' śabd kā prayog nahīm
関係 18番 世紀 まで 私たち ウルドゥー 言葉 の 使用 否定
pāte aur 'ghālib' ko apnā dīvān 'hiṃdī kā' aur
分かる-未完 そして ガーリブ 対格 自分の ガザル詩集 ヒンディーの そして
'mīr' ko apnī zabān 'hiṃdī' ghoṣit karte pāte
ミール 対格 自分の 言語 ヒンディー 明言した する-未完 分かる-未完
haiṃ.
コー現在
「18世紀までウルドゥーという言葉が使われたのも見られず、ガーリブは自分のガザル詩集を『ヒンディーの』と、ミールは自分のことばを『ヒンディー』と明言しているのが分かる。」 [HBh p.109]

(24) は二つの文で構成されている複文だが、どちらとも述語動詞が 'pānā' になっている。どちらも同じ意味合いで使用されているが、前者は「ウルドゥーということばの使用」という名詞句が目的語となっている。後者はこれまで他のところでも見られた、目的語への文の埋め込みを伴った例である。「ガーリブは自分のガザル詩集を『ヒンディーの』と、ミールは自分のことばを『ヒンディー』と明言している。」という従属文が、'pānā' の目的語として埋め込まれているわけである。主語の「ガーリブ¹⁸⁾」、「ミール¹⁹⁾」を対格表示し、動詞述語は斜格形にされる。

また、先の目的語型に使用されていた動詞と同様、斜格形にならず、従属文の動詞形態のまま埋め込まれているのが次の二つの例文である。

- (25) ... to āj ke bhārat ko bahut picḥrā huā pāte haiṃ.
小詞 今日 の インド 対格 とても 遅れる-完了 コー完了 得る-未完 コー現在
「すると、(我々は)今日のインドがとても遅れていることが分かる。」
- (26) jab vyakti apne āp ko ek aisī sthiti meṃ ghirā pātā
関係 人 自分 自身 対格 1 この ような 状況 に 囲まれる-完了 分かる-未完
hai ki jis se nikalne kā use mārg nahīm miltā.
コー現在 同格 関係・斜から 出る-不定・斜 の 彼に 道 否定 見つかる-未完
「人は自分が抜け出る道が見つからない状況に囲まれたと気付いた時に・・・。」 [SBh p.21]

(25) では、「インドがとても遅れている。」の動詞述語「遅れている」‘pichrā huā’ の ‘huā’ のように直格形のままで埋め込まれている。(26) も、従属文の動詞述語「囲まれた」‘ghirā’ が直格形のまま埋め込まれている。

これらはすべて非定形節化による埋め込み文だが、これまでどおり定形節のパターンも無論見られる。

- (27) ve pāte haiṃ ki ātmā kī amartā par arjun dhyān
あの方 分かる-未完 コー現在 同格 魂 の 不死 にアルジュナ 注意
nahiṃ de rahā hai.
否定 与える-幹 続く-完了 コー現在
「あの方(神)は、魂は死なないことにアルジュナが気づいていないのを分かっておられる。」 [SBh p.37]

(27) も先の目的語型の動詞群と同じで、‘pānā’ の目的語としては、もはや何も示されることがない。この定形節構造を取るのは、「分かる」という意味の場合のみである。

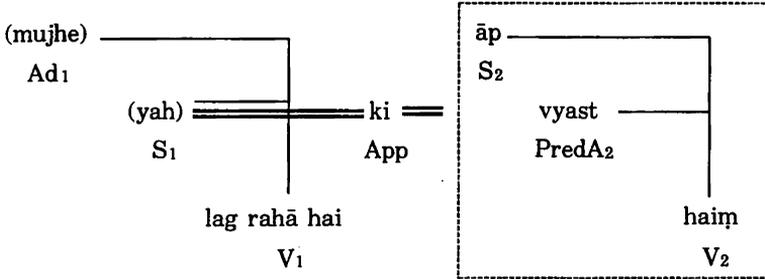
3. 非定形節による埋め込み構造と知覚動詞の特徴

前章では、ヒンディー語の知覚動詞の例をいろいろ観察してきたが、ここでは統語構造に焦点を当て、本稿で取り上げた知覚動詞を使った文の統語的類型、および知覚動詞自体の特徴についてもまとめてみたい。

これまで挙げた例は、主語型と目的語型に大きく分けることができた。そのうち、主語型の定形節構造の場合は、以下のとおり主文と従属文を同格接続詞の ‘ki’ を介在させ並列させるパターンであった。

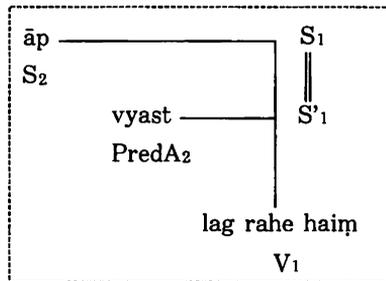
[主語型]

①定形節



これは前章の (1) を構造化したものである。点線内は従属文であり、そこには定形節が入っている。また、主文の Ad_1 は、 V_1 の当事者である人を与格表示したもののだが、これは特に個人的に感じることを述べるのでなければ、明示する必要はない。つまり、「私には・・・と思える」という場合ならば明示されてもおかしくはないが、例えば日本語の形式名詞「よう」の場合は、「？私にはあなたはお忙しいようですね。」という風に、感じを受ける当事者 (Ad_1) を明示すると、文としてはおかしい感じがする。それはこの「よう」を使った場合、「私」が話題なのではなく、あくまで「あなた」になっているのである。ヒンディー語で「よう」と「思える」のような話題による使い分けはないが、ヒンディー語でも、話題となっているのが「私には思える」という「私」ではなく「あなた」に移ると、当然、「私」という当事者は欠落しやすくなる。果ては、以下のとおり従属文を非定形節化し、主文に埋め込む構造を取ることができるようになるのである。

②非定形節



この非定形節の構造では、従属文が主文の S_1 として埋め込まれているのが分かる。その埋め込みの際、従属文の S_2 は主文に S_1 に一致し、 V_2 のコピュラが削除され、残った PredA は S_1 の残像である S'_1 としてそのまま埋め込まれる。同時に、 V_1 が V_2 の性・数そして時制を引き継ぐ。ここの ‘ap’ は、男性・複数形なので、 V_1 もそれに一致した形に変化することになる。

この定形節から非定形節化を経た主文への埋め込み²⁰ は、以下の英語の ‘seem’ に見られるのと同じである。

It seems (to me) that she is busy. ⇒ She seems (to me) to be busy.

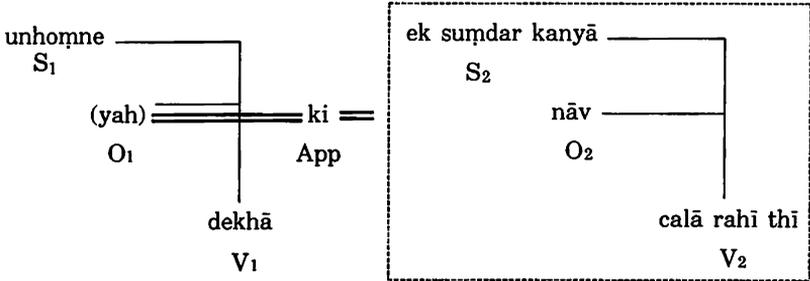
仮主語である ‘it’ の位置に従属文の主語 ‘she’ が上昇するこの現象を Raising と呼ぶが、従属文の述語形容詞 ‘is busy’ は非定形、すなわちコピュラに相当する be 動詞の不定詞に変化させ ‘to be busy’ とするか、もしくはその be 動詞を外し、形容詞だけで ‘She seems busy.’ とすることができる。

一方のヒンディー語では、先にも述べたようにコピュラは削除されるパターンしかない。時制を伴った定形のコピュラを、未完了分詞 ‘hotā/hotī/hote’、完了分詞 ‘huā/huī/hue’、不定詞 ‘honā/ (honī²¹) /hone’ のような非定形に変え、そのまま主文に埋め込むということはない²²。また、感じる当事者を明示する場合、英語は非定形節でも to me を入れることが可能である。それはヒンディー語でも同じだが、実際は、話題を感じる当事者にあるのであれば、定形節のパターンを使う方が普通である。

この S から S への埋め込み構造は、‘lagnā’ 「感じられる、思われる」の場合は、動詞述語文²³の場合には見られない。しかし、‘dikhnā’ 「見える」の場合は、名詞もしくは形容詞述語文および動詞述語文のどれでも、S から S への埋め込みが可能である。聴覚を表わす ‘sunāi denā’ の場合は、動詞述語文の場合のみ、埋め込み構造が使用される²⁴。では、もう一つの目的語型の構造を図式化してみよう。先ほどと同様、まずは定形節からである。

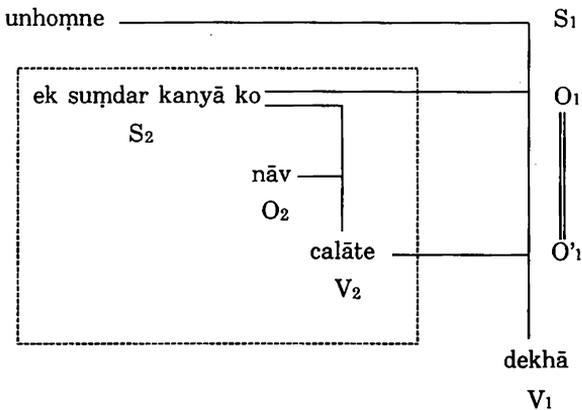
[目的語型]

③定形節



これは、埋め込み文の基底構造となる (17) の定形節の文である。O₁の近称詞 'yah'²⁵ が同格接続詞 'ki' を介し、点線内の従属文を照応する。この近称詞は構造を明示するために便宜的に設けたものだが、2.2. 内で挙げたそれぞれの定形節の例文どおり、通常表示されることはない。点線内の定形節の従属文は、先の主語型と同じように非定形節化されて、主文の目的語の位置に埋め込まれる。それが以下の構造図である。

④非定形節



従属文での主語であった「美しい一人の娘」は後置詞の 'ko' で対格表示され、述語動詞は女性・単数形から主語との性・数の一致を起こす必要のない中立的な斜格形 'calāte' に変わる。もっとも、(19) のように斜格形に変わらず直格形のままのこともあるが、通常は一致する主語を失い、述語動詞には、主語との一致を超えた斜格形が使用される。

このように、主語型であれ目的語型であれ、また、統語構造のみに関しては、従属文の述語が名詞であれ、形容詞であれ、動詞であれ、①、③の定形節を伴う基底構造から、②、④の埋め込み構造が生成されることが分かる。S⇒S、S⇒O Raising による埋め込み構造をまとめると、以下のとおり公式化できる。

《主語型》

$$S_1 (=S_2) \quad + \quad V_2 \quad + \quad V_1$$

$$\quad \quad \quad \parallel$$

[Noun, Adjective, Imperfect participle / Perfect participle]

《目的語型》

$$S_1 \quad + \quad S_2 \text{ (Acc)} \quad + \quad V_2 \quad + \quad V_1$$

$$\quad \quad \quad \parallel$$

[Noun, Adjective, Imperfect participle / Perfect participle]

非定形化される動詞形態については、主語型の場合、S₁と [] 内の品詞が、性・数の一致をしたまま埋め込まれる。目的語型の場合は、本来の主語 S₂と [] 内の品詞が性・数の一致を起こさず、中立な斜格形を取る。主語 S₂は対格表示され、文法上の主語としての資格を失うため、動詞が斜格形を取るのはヒンディー語では自然といえるが、事実、前章の例文に見られたように、主語型同様、性・数を一致させたまま埋め込まれることも多い。

ところで、名詞述語文、形容詞述語文におけるコピュラは、埋め込みの際、削除されてきたが、動詞の未完了分詞、完了分詞はそもそも未完了、完了の状態を表わすもので、形容詞的な性格を持つものである。したがって、形容詞とコピュ

ラの組み合わせと同じく、現在時制を表わす『未完了分詞+コピュラ』もまた、コピュラが削除されると考えれば、(16) のような ‘calāte’ が入るのは容易に理解できる。しかしながら、(21) の ‘sunnā」 「聞く」でも見られたように、以下のとおり ‘hue’ が付く場合もある。

unhomne ek sundar kanyā ko nāv calāte hue dekhā.
 その方+能格 1 美しい 娘 を 舟 漕ぐ-未完 コー完了 見る-過去
 「その方は一人の美しい娘が舟を漕いでいるのを見た。」

一般にこの ‘hue’ はなくても構わない、省略可能なオプションとして処理される。しかし、統語構造の操作の観点から言えば、これはただのオプションではなく、「未完了の状態にある」という意味をきちんと担っているものと解することができる。これが挿入されるのは、話題が動作自体ではなく、動作が未完了の状態にある、つまり、「漕いでいる」になっているからである。実際、「漕ぐのを見た」と「漕いでいるのを見た」や英語の ‘see’ や ‘hear’ が非定形の動詞として取れる原形不定詞と現在分詞（‘row’ vs. ‘rowing’）を取ることができるのと同じである。例えば、動作が話題なのであれば、わざわざ「状態にある」ということまで言及する必要がない。したがって、その場合は「漕いでいる」（-ing 形）を使うまでもなく、「漕ぐ」（原形不定詞）のみで済む。それと同じで、ヒンディー語の ‘calāte’ vs. ‘calāte hue’ も、状態に言及するのであれば、はっきり ‘hue’ を使う必要が出てくるが、それ以外の場合は ‘calāte’ で構わないだけである。

一方、(8)、(18)、(19) のように ‘dekhnā」 「見る」で使用されていた完了分詞についてはどうであろうか。ヒンディー語の完了分詞は、それ自体が過去時制を表わす。非定形の分詞としては、英語の過去分詞のように動作の受動性を強く表わすものではなく、あくまで動作の完了性の意味合いが強いものであり続ける。「座る」のような動作を表わす動詞の場合、「座った」という過去形になると、完了状態ではなく、動作が完了したこと、すなわち単なる過去の事象を表わすものと捉えられやすくなる。したがって、状態に強調を置く場合は、未完了分詞の時と同じ論理でコピュラが必要になるのである。この『完了分詞+コピュラ』といえは、

いわゆる現在完了形（または過去完了形）と呼ばれている組み合わせだが、これはまさに「その状態にある」という意味に使用されるものである。つまり、この埋め込み文も、元々『完了分詞+コピュラ』になっていると仮定すれば、そこからコピュラが削除されたと理解することができる。結果、「座る」が使用されている(18)、(19)の例も、その瞬間、動作が完了したこと自体を示すものではなく、あくまで動作が完了した状態を示すものとなっているのである。

ところで、これにも先の未完了分詞同様、さらに非定形であるコピュラの完了分詞を付けることができる。

mairṃne ek baṃḍar ko peṛ ke nice baiṭhe hue dekhā.
私+能格 1 猿 を 木 の 下に 座る-完了 コー完了 見る-過去
「私は木の下に一匹の猿が座っているのを見た。」

これは『完了分詞+コピュラ』の現在完了形がそのまま埋め込まれたように見えるが、これは以下のような例の埋め込みと考えられる。

ājkal merā bhatijā jāpān āyā huā hai.
最近 私の 甥 日本 来る-完了 コー完了 コー現在
「うちの甥が日本に来ているんだよ。」

動作の完了性とその状態を述べるには、現在完了形の『完了分詞+コピュラ』でよいはずだが、上の文ではさらにその状態にあることを強調する²⁶ために、現在完了形の『完了分詞+コピュラ』の命題に、さらにコピュラが加えられている²⁷。このような文が非定形節化した上で主文に埋め込まれる時、中立の斜格形変化を起こし、主文に埋め込まれたものと考えることができるのである²⁸。

以上がヒンディー語の統語構造が語る大きな特徴だが、もう一つ、本稿で主に取り上げたヒンディー語の知覚動詞について、上の統語構造に照らし合わせながら改めて考察してみよう。

②と④の埋め込み構造で Raising を起こす名詞述語文、形容詞述語文、動詞述

語文のうち、自動詞 'lagnā' 「感じられる、思われる」(それに相応する複合動詞も含む)、また、他動詞 'mānnā' 「認める(思う)」や 'samajhnā' 「理解する(思う)」は名詞述語文および形容詞述語文に、そして、自動詞 'dīkhnā' 「見える」(これも複合動詞を含む)、'sunāi denā' 「聞こえる」、それぞれの他動詞に当たる 'dekhnā' 「見る」と 'sunnā' 「聞く」、および 'pānā' 「分かる」は動詞述語文に限られていた。このような制限がなぜ出てくるのだろうか。

英語の 'see' の例文²⁹を見てみよう。

- a. I saw him enter the room.
- b. I have twice seen bribery overlooked.
- c. I saw him to be a liar.
- d. He didn't see that she was mistaken.

元来の視覚を使った感覚を表わすのが、原形不定詞を使った a. の「私は彼が部屋に入るのを見た。」と、過去分詞を使った b. の「わいろが大目に見られているのを2度見た。」である。これらは、S⇒O Raising を起こし主文に非定形節が埋め込まれたものである。c. は、「見る」という意味ではなく、「彼がうそつきだということが分かった。」という認識の「分かる」に変わる。こちらも、S⇒O Raising を起こしたものではあるが、埋め込みの際に非定形となる述語名詞が不定詞を取っている。最後の d. 「彼には彼女の勘違いが分からなかった。」は、a.、b.、c. を生成する基底構造のものであり、定形節のままになっている。これも c. 同様、単に視覚による感覚ではなく、視覚を通して得られる認識を示すものとして使用されている。

つまり、英語の場合は、この 'see' という動詞を感覚によるものと認識によるものを、統語構造もしくは非定形の動詞形態によって区別していることになるのだが、ここで改めてヒンディー語の方を見てみよう。動詞 'dekhnā' は、視覚の「見る」という意味で使用されている a. の場合の埋め込みは、英語と同じく可能である。c. の「分かる」という意味の場合、名詞述語文、形容詞述語文を目的語として埋め込んだ「A が B (だ) と分かる」に対し、この動詞 'dekhnā' は使用

されない。これを表わすのは、知覚、認識を表わす自動詞 'lagnā' やそれに準ずる複合動詞群、および他動詞の 'mānā' や 'samajhnā' になる。最後の d. の定形節は、a.、b.、c. を生成する基底構造だが、この場合ならば、'dekhnā' も「見る」、「分かる」の両方の意味で使用することが可能である。

したがって、ヒンディー語では、英語の埋め込み構造のように動詞述語文と名詞もしくは形容詞述語文の動詞形態を違えて「見る」という感覚から「(見て) 分かる」という認識の意味に及ぼせることはない、つまり言い換えれば、ヒンディー語の 'dekhnā' は、英語の 'see' ほど多義性に富んでいないといえることができる。

このことは、'sunnā' 「聞く」の場合にも当てはまる。「聞く」と「(伝え聞いて) 知っている」という意味ならば、動詞述語文であれ名詞述語文、形容詞述語文であれ、定形節構造でいうことができる。しかし、例えば、「私は彼が医者だと聞いている。」という認識に関わる意味に限定される場合にも、名詞述語文もしくは形容詞述語文が埋め込まれるかということ、そうではない。あくまで、動詞述語文の埋め込みでかつ、聴覚の「聞く」という意味の場合のみである³⁾。この点では、英語も動詞の非定形に不定詞や原形不定詞を取ることはないようである。ところで、先ほどの 'see' の b. のように埋め込み文の動詞の非定形が過去分詞になるものが英語には見られる。

e. She heard her name called.

この e. 「彼女は自分の名前が呼ばれるのを耳にした。」では、埋め込み文の動詞述語が非定形の過去分詞になっている。ヒンディー語では、'sunnā' 「聞く」であれ、'sunāi denā' もしくは 'sunāi paṛnā' の「聞こえる」であれ、英語の過去分詞に相当する完了分詞を使うことはない。というのは、ヒンディー語の完了分詞は「完了」が主であり、「受動」の意味はあくまで副次的なものだからである³⁾。つまり、英語の方は、'be called' もしくは 'being called' のような受動でかつ未完状態を示しているといっても過言ではないであろうが、ヒンディー語の場合、事象が既に完了状態にあることを示すため、「聞く」や「聞こえる」という動詞と共起することが論理的にありえないのである。

したがって、‘sunāi denā’ もしくは ‘sunāi paṛnā’ は完了分詞を取るパターンはなく、多義性についても英語と変わらないと考えてよい。

このように、ヒンディー語の知覚動詞は、同じ動詞を統語構造や埋め込まれる側の述語動詞の動詞形態を違えて、異なる意味を表わす、すなわち多義性には富んでいないといえる。五感を通じた直接的な感覚はそれぞれ専用の動詞で表わし、感覚による知覚全般を表わす場合は ‘lagnā’ を使用する。もう一つのカテゴリーとして、他動詞で構成される知的な知覚、つまり認識を設けることができる。

五感による感覚		感覚による知覚		認識
dīkhnā sunāi denā	dekhnā sunnā	lagnā	dekhnā sunnā	mānnā samajhnā pānā

感覚による知覚に挙げた ‘dīkhnā’ と ‘sunnā’ は、「(見て) 分かる」、「(聞いて) 知る」の意味で、定形節のみの使用であることをあらかじめ付言した上で、これらの知覚動詞の中に挙げたものの多義性についてももう少し言及すると、この中で多義性に富んだ動詞といえば、‘lagnā’ と ‘pānā’ である。というのは、これらは知覚の意味以外にも使用されるからである。‘lagnā’ の原義は「ある面が別の面に接する」であり、‘pānā’ は、「ものを獲得する」という原義を持つものである。本来、それらが「感じられる」、「分かる」の意味として知覚の意味に及んで使用されているのだが、前者は与格構文を取ることからしても自然に、感覚的に分かるものであることが容易に理解できる。それに対し、後者は他動詞であることもあり、能動的で知的な認識の意味に使用される。

また、埋め込みの点でいうならば、‘lagnā’ で S⇒S Raising を起こすのは名詞述語文、もしくは形容詞述語文に限られ、動詞述語文は同格接続詞を使った定形節の構造パターンになる。それに対し、S⇒O Raising を取る ‘pānā’ は、‘lagnā’ と違い、名詞述語文、形容詞述語文、動詞述語文のすべての埋め込みが可能である。

これらを総合すると、ヒンディー語では ‘pānā’ が一番多義性に富み、かつ統語構造上も従属文の述語品詞を問わず、定形節、非定形節の両方が可能な知覚動

詞といえよう。

4. おわりに

ヒンディー語の知覚動詞を使った文は、埋め込み処理がなされた場合、あたかも単文のように見えるが、実際は $S \Rightarrow S$ もしくは $S \Rightarrow O$ Raising を起こし、従属文が主文に埋め込まれたものであり、根本的には複文と呼ぶことができる。

また、知覚動詞には、従属文が名詞述語文、形容詞述語文、もしくは動詞述語文であるかによって、非定形節化が可能かどうかの制限が生じる。この制限は、裏を返せばその知覚動詞の多義性に依拠しているといえよう。つまり、知覚動詞が多義でないからこそ、従属文の種類により Raising の制限がかかるのである。特に、感覚から二次的に発生する知覚もしくは認識については、同じ動詞により定形節のままのパターンで表わすか、感覚を表わすものとは別の動詞を用いて表わす。その時も、Raising が関わる場合は名詞述語文もしくは形容詞述語文に限られるのがほとんどである。ただ例外として、‘pānā’ のみが名詞述語文、形容詞述語文のみならず、動詞述語文までも埋め込み操作を可能にしている。知覚動詞と呼べる動詞の中でも、唯一これが統語構造パターンの多様性と多義性の相関を示すものになっているのである。

例文略号および翻字

略語：直格=(無表記)、斜格=斜、未来形=未来、現在形=現在、過去形=過去、直說法=(無表記)、命令法=命令、仮定法=仮、語幹=幹、不定詞=不定、未完了分詞=未完、完了分詞=完了、コピュラ=コ、能格=能格、接続分詞=接続、否定辞=否定、同格接続詞=同格、関係詞=関係、(なお、名詞の性・数は省略)。

翻字：①t/d/ŋ/r/s はそり舌音。②c は[tʃ]。③ŋ(=n/ñ/ŋ/n/m) は鼻音記号、ṃ は鼻母音記号。④子音+h は有気子音[Cʰ]。⑤ś は摩擦音[ʃ]。⑥r は母音。

注

- 1 後に出てくるヒンディー語の近称詞による照応機能を果たすものと推察される。
- 2 ヒンディー語の与格後置詞‘ko’はしばしば対格表示にも使用される。以下、例文内では必要に応じて‘ko’を対格と表示する。
- 3 ‘samajhnā’「理解する」や‘mānnā’「認める」には目的語を取らない自動詞的な用法もある。
- 4 原義は「出る」である。「Aが(結果として)出てくる」から「判明する、後で分かる」に転じる。
例：yah bāt sac niklī. 「このことが真実だと判明した。」これも本稿で述べる埋め込み文を取る動詞の一つであるが、本稿では大きく取り上げない。
- 5 例文に出典文献があるものは、その文献の省略記号を付けてある。文献の詳細は本稿末尾を参照。
Mahābhārat kī śreṣṭh kahānīyāñ=MBh, Śrīmadbhāgavat kī śreṣṭh kahānīyāñ=SBh, 基礎ヒンディー語=KH, Hind svarāj= HS, Hindī bhāṣā kā samājsāstr= HBh, Teach Yourself Hindi= TYH. なお、例文のグロスの略号については、本稿末尾に掲載してあるのでそちらを参照されたい。
- 6 これは、インド・ヨーロッパ語に広く見られる、単数の相手への二人称複数形の使用である。通常、相手に対する敬意を示したり、親しくない相手に対し距離を置いたりする場合に使用される。
- 7 ‘mālūm’, ‘gyāt’, ‘mahsūs’, ‘pratī’のうち‘pratī’は、他の‘mālūm’, ‘gyāt’, ‘mahsūs’のような、単純過去‘huā’(この場合、「分かった」、「知った」になる)や現在進行形もしくは過去進行形‘ho rahā hai’, ‘ho rahā thā’(男性・単数形のみ表記)という言い方がなく常に‘hotā hai’, ‘hotā thā’(同様に男性・単数形)になる。
- 8 この(4)の‘mālūm hotā hai’や(3)で使用されていた進行形‘ho rahā hai’(同様に男性・単数形)はどちらも、日本語の形式名詞「よう」「そう」や「みたい」、また英語の‘seem’に相当する意味になるが、‘mālūm’+コピュラ(原形は「なる」の時と同じ‘honā’)の場合は、コピュラの時制(現在/過去/未来)に応じて「知って/分かって」+「いる/いた/いるだろう」という具合に状態を表わすものになる。
- 9 この‘mālūm honā’の‘honā’はコピュラではなく、本動詞「なる」。「知った/分かった状態になる」の方。
- 10 ここで‘ki’が必要なのは、会話文のためと推察される。音声言語の場合、ポーズを入れることで、文の切れ目、すなわち従属文の開始を宣言することが可能だからである。
- 11 本来の意味は「真理の把持」。ガンディーにより提唱されたいわゆる非暴力・不服従運動のこと。
- 12 この同格接続詞‘ki’は、2.1.1.でも既に出てきているように、一見、英語の同格節を導く *that* とよく似ているようだが、この例のように *wh-* 疑問文に当たる疑問文が来ても消えることはない。英語の *that* というよりも、むしろ日本語の「と思う」、「と分かる」のような格助詞「と」と同じと考えた方がよいだろう。
- 13 直格形には、男性・単数形の‘-tā’, 男性・複数形の‘-te’, 女性・単数もしくは複数形の‘-tī’がある。ここは主語が「娘」なので、‘calāñ’となっている。

- 14 日本語の場合は、「-て・いる」形で習慣も進行も表わすことができる。また、いわゆる副詞群の「ずっと」「ときどき」などを共起させて、習慣か進行かはっきり使い分けることができる。
- 15 これが一般に習慣表現と呼ばれるゆえんである。
- 16 デリー周辺ではこの言い方がよく使用されているとも聞くが、実際そうであれば、ピジン・ヒンディーの中で言語変化を起こしたものとも考えられる。
- 17 ヒンディー語のこの'dekhnā'には、日本語の感嘆詞「ほら、ねえ」のような用法もある。例えば、日本語の「ほら、見て」の場合、'dekhnā'の命令形を使用する(例:'dekho')。英語の場合も'see'(または'look')が命令形で使用される。一方、ここで挙げる「分かる」の意味の場合、「ほら(ね)、分かった?」に相当するものとしては'dekh liyā?'という具合に、ベクトル動詞'lenā'「取る」を付加した動詞複合を用いる。ここは、日本語で言うところの「見て取る」のような意味合いと考えてよいだろう。ヒンディー語の動詞複合については、西岡(2004)を参照されたい。
- 18 ウルドゥー語の著名な詩人の一人。
- 19 ガーリブ同様、ウルドゥー語の著名な詩人の一人。
- 20 変形生成文法の枠組みならば、いわば前者が深層構造で後者が変形規則適応後の表層構造となるであろう。実際、文派生の段階という点で、定形節の文が非定形節化の基底にあることは疑いないが、現実には構文を違えている以上、深層構造、表層構造の文がともに同じ心理値で使用されるものとは思えない。談話文法的には異なるはずである。
- 21 不定詞が名詞に係る場合に、その語尾が女性・単数もしくは複数に対して形容詞変化を起こしたものの。
- 22 論理的にはコピュラを残した場合、'āp vyast [hotī/huī/honī] lagī haim'([未完分詞/完了分詞/不定詞]の順)となるが、まず見かけることはないパターンである。
- 23 前章の2.1.1の(2)と2.1.2の(6)を参照。
- 24 前章2.1.3および2.1.4を参照。
- 25 「これ」「それ」を表す指示詞の一つ。発音は[ye]。
- 26 日本語で言えば文にさらに「のだ」を付け加えるような感じである。例文中は口語体なので、日本語の口語体「ん」を使用している。
- 27 『完了分詞+コピュラ』にさらにコピュラを付け加えるものに関しては、西岡(2002)を参照。
- 28 動詞の意味的性質(一般的に言われる動作動詞や状態動詞)によって、この形式が出やすいかどうか決まってくるものと推察される。
- 29 『CD-ROM 版 新英和・和英中辞典』(研究社)
- 30 前掲(21)参照。
- 31 主語が「何かをした」という行為は、視点を変えて目的語の「何か」から見れば「された」となるが、そこから生成される受動の意味は、ヒンディー語では通常、能格構文内で見られるものである。この完了分詞の持つ完了性および受動性については別の機会に改めて議論したい。

引用文献・資料

- Gāṛḥdhī, Mohandās, K. 1949 *Hind śvarāj*. translated by Amṛtlāl Ṭhākordās Nāṇāvaṭī, Navjivan Prakāśan Mandir, Ahmadabād, originally published in 1909.
1996 『CD-ROM 版 新英和・和英中辞典』研究社。
- 古賀 勝郎 1986 『基礎ヒンディー語』大学書林。
- Snell, Rupert & Weigtman, Simon 2003 *Teach Yourself Hindi*. Teach Yourself.
- Śrīvāstav, Ravīndranāth 1994 *Hindī bhāṣā kā samājsāstra*, saṃpādak Binā Śrīvāstav Mahendra aur Dilīp Sinṃha, Rādhākṛṣṇ Prakāśan, Dillī.
- Varmā, Dayānamd 1996 *Śrīmadbhagavat gīta*. Māiṃḍ eṇḍ Bāḍī Risarc Semṭar, Dillī.
- Vyathithṛday, Śrī 1998 *Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṃ*. Sunil Sāhitya Sadan, Dillī.
- 1998 *Śrīmadbhagavat kī śreṣṭ kahāniyāṃ*. Sunil Sāhitya Sadan, Dillī.

参考文献

- Abbi, Anvita 1994 *Semantic Universals in Indian Languages*. Indian Institute of Advanced Study, Shimla.
- Central Hindi Directorate 1972 *A Basic Grammar of Modern Hindi*. New Delhi.
- Dahl, Östen 1985 *Tense and Aspect Systems*. Basil Blackwell, UK.
- Dik, Simon C. 1978 *Functional Grammar*. North-Holland Publishing Company, Amsterdam.
- Fillmore, C. J. 1968 “The Case for Case” in Bach and Harmans (eds.) *Universals in Linguistic Theory*. New York.
- Guru, Kamtāprasād 1978c *Hīndī vyākaraṇ*. Nāgarīpracāriṇī Sabhā, Vārāṇasī.
- Hudson, R. A. 1999 The Difficulty of (So-Called) Self-Embedded Structures. 『現代言語学の射程』英宝社。
- Jagannathan, V. 1981 *Prayog aur prayog*, Oxford University Press, India.
- 金田一春彦 1950 「国語動詞の一分類」『言語研究』15。
- 編 1976 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房。
- 西岡美樹 2002 「「て」形動詞が関わる動詞複合の、ヒンディー語からの考察—アスペクト表現を中心に—」『日本語・日本文化 第28号』大阪外国語大学留学生日本語教育センター。
- 2004 「ヒンディー語のいわゆる複合動詞について」『EX ORIENTE vol.10』大阪外国語大学言語社会学会。
- Śrīvāstav, Ravīndranāth 1960 *Hindī prayog*, Śarad Bhāṣina, India.
- 寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版。

Varma,
Ramcandra

1960 *Hindī prayog*, Sāhitya-ratna-mālā Kāryālaya, India.

———

1965 *Mānak hindī vyākaraṇa*, Caukhambā Vidyābhavan, India.

On the Sentences with a Verb of Perception in Hindi

Miki NISHIOKA*

In many languages, we see some characteristics shown in the verbs of perception. Hindi, which is counted as an Indo-European language, is not an exception. It shows some remarkable characteristics in verbs of perception syntactically and semantically.

The main aim of this paper is to observe various sentences that contain a verb of perception and to make clear the features of the structure of verbs of perception in Hindi language syntactically and semantically in contrast with Japanese and English.

As we already know, in Hindi, a complex sentence with the appositive pronoun 'ki' is usually used as a sentence with verb of perception in the basic structure. But we can also observe that some verbs of perception in Hindi allow a subordinate clause to be embedded either in a subject or in an object of the main clause through the grammatical process of so-called raising. In this paper, we call the former type Finite Clause and the latter one Non-finite Clause.

In conclusion, we will find that the type of Non-finite Clause has 2 kinds of raising as Subject to Subject and Subject to Object. Then we will also remark that this raising does not occur in *every* verb or *every* use of a verb of perception. In other words, it has some limitation in itself. From a viewpoint of embedding a subordinate clause into the main clause, this limitation depends on what kind of subordinate clause, i.e., noun predicate, adjective predicate or verb predicate clause, is supposed to be embedded into the main clause. In addition, it will become clear that this raising process relates to the polysemy of verbs of perception, especially as in 'dikhnā' vs. 'dekhnā', 'sunāi denā' vs. 'sunnā' and

* Part-time Instructor of Osaka University of Foreign Studies

‘lagnā’ vs. ‘mānnā’; all of these three consist in the pairs of intransitive verb and transitive verb, and ‘pānā’, which has itself various usages not only as verb of perception, but also as main verb and even as auxiliary verb.